

『馬琴日記』にあらわれた病氣と医療

—滝沢みちを中心に—

立川 昭 二

一

嘉永元年（一八四八）五月十一日、江戸は明け方から雨が降り出し、一日中降りしきり、夜になっても止まなかった。その夜、雨音に耳を澄ましなが、四谷信濃坂（現東京都新宿区信濃町）の居宅の一室に端坐した滝沢馬琴は、日記に次のように記す。

昼時、吾等腹痛、又滑便瀉ス。加味平胃散煎用、暮時前まで、都合三度瀉ス。熊胆服用。昼後、鰯・黄瓜・ぬたの当りしゆえ也。今晚、夜食をたうべず。気分ニ替ることなし。

『嘉永元年戊申日記』（岐阜市円徳寺蔵）と表紙に墨書されたこの日記は、いま馬琴が記すといったが、じつは馬琴自身の筆ではない。八年前の天保十一年正月、すでに馬琴は両眼の明を失っていた。日記を口述筆記していたのは、嫁のお路（みち）であった。このとき、馬琴は八十二歳^(一)、お路は四十三歳。馬琴の長男でお路の夫である宗伯はすでに十三年前に歿し、馬琴の妻お百も七年前他界し、いまは盲目の舅馬琴と未亡人の嫁お路と病弱な二十一歳の嫡孫太郎とその二番目の妹で十六歳のさち、という心もとない滝沢家であった。そして、この日から半年後、馬琴は世を去るのである。

さて、翌十二日、江戸は曇り空、馬琴の腹痛もかわらず、服薬は昨日の加味平胃散から平胃散(三)に変え、このところお路が毎日続けていた『女郎花五色石合』の代筆は休む。その翌日の十三日、馬琴の腹具合は同じだったが、代筆は再開した。ところがこの日、日頃から病弱な太郎が風邪を再発したのか、顔に腫物ができ、喉(のど)と脚も腫れ、六味湯・独活湯(四)を服用する。

太郎、四時頃、母ニ髪月代致貰、平庵方へ行。此せつ風疾再発之気味にて、一面部に腫物出来、咽喉・脚も少々腫候間、療治を乞ふ。則、六味湯七貼を授らる。是迄之独活寄生湯(五)を転薬致、明日より六味湯を煎用。

それから三日後の十六日、馬琴と太郎がようやくおさまりかけた頃、こんどはさちが時候あたり、うえ、寄生虫の回虫(六)がたくさん出てきて、腹痛となった。そこで、自家製売薬の黒丸(七)子と熊胆などを服用させる。

おさち、時候あたり之上、此間中より、日々回虫多く出候ゆへ、昨夜ハ腹痛致候ニ付、黒丸子服用。今早朝未明、腹痛不止候間、熊胆服用の処、暫して吐ス。依之、起中安回虫煎用。昼後迄不食にて、打臥罷在、昼後より、茶づけ飯、食之。

そのご、馬琴は「今日も悪寒、食事不進」(五月十九日)、あるいは「此せつ、甚冷氣にて、時候尤不順也、吾等機分不出来」(五月二十二日)の日々を過ぎていたが、お路には代読・代筆を続けさせていた。そこにまた例によって太郎が六月一日時候あたりで発熱、柴胡姜桂湯(七)をつくって服用する。

太郎、時候あたり、昨朝より熱氣有之ニ付、自療にて、柴胡姜桂湯煮用ス。終日平臥。昼前、おミち代読、宇治拾遺三卷、読之。

その六月六日、さち、は服薬の効き目が出てきたのか、回虫が大量に出てきて、二十日目に平癒した。

おさち、回虫丸薬の功にて、折々一ツ二ツツ下り候所、今日は二寸許の小回虫数不知多く下り候由也。利呂丸、尤も功一じるし。

六月も下旬になると天候も安定したのか、晴天の日が続き、いよいよ酷暑の夏となった。六月二十五日は「晴、極大暑、風なし、凌かね」、そして七月二日になると「此せつ、日々炎熱、老人并ニ脆弱者之者、凌かねルほどの事也」といった炎暑の日が続く。七月十九日にはまた例によって太郎が、「昨日より、膝^(ツマ)頭^(ツマ)はげの如き腫物出来、歩行不自由」になり、二十一日にはその腫物も「ふき切、よう(癰)も出候」とおさまってきたが、医師の磯田平庵や草間宗仙がときどき往診にやって来ていた。たとえば八月三日にはこうある。

夕七時、草間宗仙来診。太郎、対面。容体を告、診脉之上、煎茶・くわしを出す。供人二人ニ酒代百文、遣之。其後帰去。

盲目で老衰の舅と病氣勝ちの息子や娘の介抱にかかりきりのお路は、いまはもう習慣的にさえなってしまった舅馬琴の口述筆記という大役があり、また家計の足しにしている売薬、つくりや売捌きもやらねばならず、日常的な家事労働、往診の医師や病氣見舞いの客たちとの応対、出勤する病弱な息子の世話等々……お路は早朝から深夜まで一刻の休まる間もなく働きづめに動いていた。その上、「日々炎熱」という酷暑の日が続いた。さすが日頃頑健で気丈なお路も、無理がたつたのか、八月八日到頭発病してしまった。

この日、江戸の空模様は不安定で、昼に夕立が三度もあり、夜中も雨音がパラパラと庇を打った。馬琴の語るまま、お路自身つぎのように日記に記す。

おミち、中暑之気味ニて、腹痛寒熱ス。五答散煎用。

翌九日、風が烈しく吹き、夕方からは雨もばらついてきた。お路は自分の容体を、馬琴の語るままこう記す。先夜の五答散(五苓散^(ハ)か?)に新しい煎薬も服用する。

おミち、昨夜発熱、且、折々腹痛ス。五答散・加味乾姜甘草、煎用。昼後より、少々醒。

そして、翌十日からはお路の腹痛も熱もひどくなり、日記はかわって太郎が代筆することとなる。

七月十日、江戸は終日南風が吹いていた。太郎は明番あきばんで四時（午前十時）頃帰宅し、食後うたな転寝をし、七時（午後四時）頃起きてきた。その晩、太郎は母お路にかわって、祖父馬琴の前に坐り、日記の筆をとる。お路は「痢病なるべし」と馬琴は口述筆記させる。

おミち、昨晚もねつ氣有之、明曉腹痛、天明迄、四度(マ)便通ズ。其より後、暮時迄拾七八度ニ及ぶ。痢病なるべし。朝飯一わん・昼飯粥式わん、夕飯式椀、右ニ付、明朝、草間宗仙草手紙ヲ以、可申遣ため、夕方、おさちヲ以、人足老人、五時入申付置。

翌十一日、医師草間宗仙が来診、お路を診察し、調剤を煎用。この日の痢数は、昨日と同じ十七度に及んだ。翌十二日は痢数は十一度に減ったが、「宿熱」があった。その翌十三日になると、「持病の虻虫」が出て、胸に差込みがあり、熊胆を服用した。太郎は別室で臥している母の容体を、次のように記す。

おみち容体、昨晚暮過より、痢数六度、昼夜三而十六度也。今日天明後より、暮時迄、痢数八度、其内老度は小便のミ。朝、粥壹わん、昼夕とも同断。其節、薩摩芋少々、右少々も順快ニ者候得ども、持病之虻虫少発、胸膈より差込事有之、其折々、熊胆(マ)を用。且、昼夜とも盗汗少々出、昨晚は痢数少ゆゑか、半夜寝ニ附ぬ。この外は変る事なし。

この夜は、虻虫の差込みで眠れなかったが、翌十四日の夕方になるとすこし和らいできた。この日、太郎は母が病氣なので欠勤、近所の人たちがお路の病氣見舞いにやって来て、「なぐさめ」では帰っていった。

おみち容体、昨夜暮時過より、今日天明迄、痢数七度、昼之七度共、十四度也。夜中、虻虫差込候而、眠兼候。熱氣も変事無、今日天明過より、暮時迄、痢数七度也。朝粥壹わん、昼同断。夕七時頃、蕎麦切少々、夕膳粥壹椀、昼後より、虻のさし込少々和らぎ候よし也。此外変事なし。

翌十五日になると、痢数も昼三度、夜三度に減り、「追々順快」に向い、十六日には天明（明け方）から暮れまでに大便五度で、それも「本便」となり、十七日には「腹痛も薄く」なり、十八日には次のように、快方に向つていった。

おミち容体、段々順快^ニ而、夜前へ厠へ不行、今朝天明少々腹痛、本便通ズ。今日天明後、大便式度・小便壹度、去十一日より、煎薬三帖づゝ服用。此外変事無し。今日朝粥壹椀・昼麦飯二わん・夕粥壹椀半、食之。

そして、十九日には気力も戻つたのか、日記代筆も出来るまでになった。この十日間にわたるお路の「痢病」とはいったいなにか。

痢病という病名は古くからあり、下痢をとまなう急性の消化器系の伝染病にひろく用いられていた。蘆川桂洲の『病名彙解』（貞享三年、一六八六）には、「痢病 俗ニ云シ、ブリ、ハラナリ。丹溪ノ曰痢赤キハ血ニ属ス、小腸ヨリ来ル。白キハ氣ニ属ス、大腸ヨリ来ル」とある。また江戸後期の見聞記として名高い津村涼庵の『譚海』（寛政七年、一七九五）には、疝氣・風邪について痢病は出度数の高い病名として出ており、やはり江戸後期の飛驒の一寺院の過去帳でも、疱瘡・虫につく病名として痢病があげられている。^(九)

馬琴は文政十年（一八二七）夏大病にかかり、一ヵ月半余臥床し、また天保五年（一八三四）夏にも大病にかかり、半月余寝込んだ。この二回の大病はいずれも下痢・腹痛のはげしい痢病であった。文政十年の馬琴の病中には、長男宗伯も同じ下痢で十数日臥床しており、いずれも今回のお路の症状と似かよっていた。

お路のこの痢病は、かつての馬琴・宗伯の場合と同じように、単なる胃腸障害ではなく、その症状からみて、細菌性腸炎か赤痢が想定される。当時の庶民生活の衛生状態からすれば、これら細菌性腸炎や赤痢が繰り返して流行していたことは明らかである。幸いこのときは滝沢家では感染者はなかったが、すぐあとに近所の豆腐屋の子ども二人が同じ痢病に罹患している。おそらく、この痢病はいずれも赤痢というよりは細菌性腸炎とおもわれる。^(一〇)

こうして、お路は八月下旬には回復し、二十六日には医師の許しもあって、「夕膳鯨の乾物を食ス」と喜しそうに書い

ている。ところがその八月二十九日に豆腐屋の娘おまきが痢病を発し、九月七日には「痢病いよく／＼危胎にて、苦痛難儀のよし申付、熊胆少々遣之」したが、十二日には末子の善吉が感染し、「亦痢病の様子にて、腹痛甚し」となった。下痢で汚れ物に困っている豆腐屋に同情したお路は、九月十六日やって来た豆腐屋の妻おすみ、にボロきれなどを与えてやる。お路自身の筆になる日記の次の一節からは、病いに対して近隣同士で助け合うという当時の庶民の心情が惻々と伝わってくる。

昼後、豆腐屋おすみ来ル。同人末子善吉義も、昨日より痢病ニ成候て、おまきと二人、打臥罷在、且、ぬれ物多く、干かね候ゆへ、病人をバ布紙の上ニねさせ候よし、申之。おまきハ、容様同様にて、困り候よし申候ニ付、ふびん候故、古大ふろしき・古綿、ふとんにせよとて、遣之。

三

この九月十六日、馬琴が前夜から食あたり気味で、夜中にお路を呼び起し、厠に行く。便が通じると腹具合はよくなったが、こんどは喘息がおこり、眠れなくなり、午前五時頃ようやくうとうととした。この日煎薬を服用し、食事もすこし減らした。

昨夜、吾等少し物あたりのやう子にて、腹強り難儀之處、おミちを呼起し、厠江行。^(ママ)胃便通候て、腹の強りハ少しよろしく候へども、喘息にて、しばらくふせりかね、七半時より、又睡民ス。^(ママ)故ニ今朝より、昌令湯煎服、大便ハ昨夜の儘にて、今日は、食少し減じたり。其余ハ替ることなし。

そのご、一家は一時平穩だったが、やがて季節の変わり目となり、霖雨がつづき、冷気がやってきた九月二十八日、また例によって太郎が風邪をひいて寝込む。

太郎、絵習如例之。風邪にて、熱氣有之、且、脚の痛所、亦腫、痛候ニ付、夕飯後より、早々枕ニ就く。おみち代読、傾

城水滄伝六編下帙二冊、読之。

十月一日に草間宗仙が来診、五積散(二)に葛根などを加えて服用する。五日になると、脚の腫れが痛み、立居も不自由で、お路とおさちが替るがわる介抱し、夜中はとくに痛みがひどくて眠れない病人を、お路は夜通し看病するのである。

太郎容躰、同様之内、左之脚腫候処痛、立居不自由にて、夜分は別痛強く成、昨夜ハ八時過迄睡かね候間、おみち看病いたし、暁はまどろミ候へバ、盗汗出ると云。其外、食物・大小便ハ替ることなし。今日、昼の内といへども、立居甚不自由にて、おみち・おさち、替るゝ介抱致候也。

太郎の具合は、そのご薬をあれこれ変えてみたりしたが、はかばかしくなかつた。そんな十月十二日立冬の日、急に寒くなり、行火(火)(安火)を用い始めた老体の馬琴は、その火氣に当たったのか、「胸痛喘息」をおこし、一晚眠れなくなる。

夕方より、吾等安火之火氣ニ当り候や、胸痛喘息にて、難義之間、種々手当致、漸く納り候間、五半時頃より枕ニにつき。然ども、今夜睡られず。明暁ニ至る。寒氣尤甚し。

翌十三日、この日も寒く、太郎の薬を人足を使って千住まで買いにやらしたり、近所でまた痢病が出た噂話を聞いたしたり、馬琴の胸痛喘息はひどくなり、横になることもできなくなり、呼び起こされたお路は薬を進めたり、背をさすつたりする。

今暁七時前より、吾等、胸痛喘息にて、横ニ臥居難かり。おみちを呼起し、種々介抱をうけ、奇応丸・熊胆等、いろ／＼用候へども、納かね、腹痛一時半ばかりにして、夜ハ明たり。然ども、其儘ニ打臥居て、昼飯、麦飯二碗、食之。薬ハ蘇子降気湯、中寒の気味も有之候間、柴胡姜桂湯煎用。

こうして、この日から馬琴は死病の床につくのである。そして十一月六日までの二十四日間、お路は昼夜馬琴の枕元につききりて、看病をすることになる。十五日もお路は明け方(天明)まで眠れなかつた。

昨夜五時過より、吾等、喘息甚しく発り、横ニ臥ことを不得。種々手当致候得共、胸中の妙薬なし。苦痛いふべからず。

おみち、終夜介抱ス。天明前ニ至りて、漸く鎮る。此時初て横ニ臥ス。おみちもやうやく枕ニ就く。然ども夜不明故ニ五時前より起出たり。昼の間ハ、吾等横ニ臥ことを得て、少々安し。

翌十月十六日、馬琴の長女お幸さちの許に養女にやっただお路の長女おつぎの婿の清右衛門が飯田町の家からやっけて来た。清右衛門は脚気の氣味にさらに痔疾で難儀していたが、良くなったといふので、馬琴の病氣に効くといふ「真鳩の黒焼」を依頼する。

翌十七日、痲病で苦しんでいた豆腐屋の娘おまきが全快し、床揚祝義の赤飯老重を持ってくる。馬琴の容体はかわらなかつたが、喘息の奇方といわれるクロみつ(黒蜜)に生姜を温酒で吞んでみると、喘息はおさまり、眠ることができた。

喘息奇方、クロみつ生姜三片、温酒にて吞下し、今晚、吾等四時前、用之。右之功香、喘息納り、明晩正六時前迄睡ニ就く。但、少々停滞之氣味あり。酒は湯を交へて飲之。

翌十月十八日、昼前に千住に取りにやっただ太郎の薬が届き、同じ頃、おさきが父馬琴の見舞いにやっけて来た。一昨日頼んでおいた真鳩の黒焼を清右衛門が黒焼屋で手に入れたのでそれを持ってきてくれた。ところが白焼を黒焼と読み違えたことがわかつたが、黒焼屋が云うには、黒焼も効くといふので、これを服用してみる。(一一)おさきは夕食をたべ、午後四時すぎ帰って行った。

今朝朝飯後、吾等少々腹痛、大便秘ニ瀉ス。但、水瀉ニあらず。形あり。其後替ることなし。早朝薬取ニ遣し候人足、昼時前、帰来ル。千住新谷石川屋ニも、元方より薬多不參、先約方へ遣し不足候由にて、此方へい纏ニ二包渡し候由にて、代錢残り百五十文持參、右請取。明朝より用候つもりにて、をさめ置。右同刻、おさき、吾等病氣見舞ニ来ル。一昨日頼置候真鳩黒焼、清右衛門、黒焼屋にて鑿穿致、漸く手ニ入候よしにて、一羽焼立候儘持參。然る処、本書ニハ、真鳩を白焼ニ致、一羽を七日ニ食し、煎葉ニも加味致候由、有之所、白焼を黒焼と読違、今さら後悔詮なく候へども、黒焼も功あるよし、黒焼屋にて申由なれば、くるみを延引致、右之黒焼を今晚より少々服用ス。おさきニ夕飯給させ、夕七時過帰

去。此節、清右衛門多用の由にて、おつぎハ不来也。

おさぎが帰ったあと、医師の草間宗仙が来診、馬琴と太郎を診察する。馬琴はこの日、朝食は浅づけ一椀、昼食は粥一椀、夕食はうどん一椀、それにぶどうをすこし口にした。小便の通じも悪くなり、一回に三、四夕(勺)ぐらいとなった。お路は舅の小便の量までを克明に記録していく。

夕七半時頃、草間宗仙来診。太郎并ニ吾等容躰を告ぐ。且、診脈せらる。太郎ハ替ることなし。吾等舌ニ少し白帯あり。小便程よく通候ハゞ、喘も宜しからんと云。如例、供人二人ニ支度代百文遣ス。吾等容躰、昨夜より、物ニより掛り、臥ことを得たり。朝飯浅づけ老椀、昼飯剛飯の粥一椀、食之。夕飯鯉鮓老わん餘、食之。うどんハ飯より味よろしく覺たり。其外ハ、ぶどう少し食したるのみ。小便兎角遠く、昨夜ハ三四夕ツツ、二度通。今日は朝より暮時迄三度。或は三四夕、五夕通る時もあり。飲湯とたすれば三分一なるべし。

四

翌十月十九日、この日江戸の空は晴れあがり、昼から風が吹き、寒気が厳しくなった。昨日おさぎが持ってきてくれた鳩の黒焼を服用してみたが、効き目はなく、明け方まで眠れず、呼び起されたお路は小青竜湯(三)を吞ませたり、あれこれと介抱して夜を明かす。

吾等容躰、昨日は喘息悩悶、おさぎ持参の鳩の黒焼を用候故歟、気分快らず候へども、明七時頃迄ハ打臥罷在、終ニハ不堪ずして、おミちを呼起し、小青竜湯を服、彼是介抱せられて、夜を明し、今朝四時前より九時前迄、初て睡ニつく。昨夜ハ不睡也。昨夜小便二度、今朝一度、三度取集、老合余。今粥一椀ヅ、三度、其外替る事なし。

翌二十日、馬琴の「煩悶」はいよいよつのる。しかし、あくまでも几帳面な馬琴の心を察し、お路は日記に「吾等」(馬琴)の容体を書きとどめていく。

吾等、昨夜ハ寒氣ニ不堪、且、煩悶ニて臥ことかなはず。暁八時迄ニおミちを三度呼び起し、介抱をうけ、八時より正六時迄、少々鎮り、夜明て起出ヅ。今日は小便暮時過迄四度、但、三四夕ツ、通ズ。朝飯ゆづけ一わん。夕飯うどんもり一ツ、只是のミ。

翌二十一日、馬琴の病勢は悪化していった。日記ももはや口述筆記というより、馬琴の文体でお路自身が書いていったものであろう。

吾等、昨晚病氣甚敷再発、夜ニ入九時より一時ほどねむり、八時過より七時迄又睡。其餘ハ喘息煩悶、明方ニ至りて少々鎮る。夜中小便三度、但、三四夕ツ、也。今日は朝飯湯づけ飯一碗、夕方干温飩かるく二椀、其間ぶどう少々、食之。温飩は殊の外活候付、うどんのゆでゆ二三椀・茶圍わん黄瓜溜一わん給候故、腹殊の外はり、且、通じなし。今日昼の間夕方迄、纔に三度也。

お路は舅の看病にかかりきりとなり、十月二十七日からは日記も太郎の筆となる。太郎は祖父馬琴のことを「家君」あるいは「家翁」と記す。十月三十日の馬琴の容体を太郎のように書いている。

家君御容体、今日も被為変候事、無之。昨夜御小水三度。天王宮ニて御祈禱行候故歟、昨夜ハ少々御平也。今朝より暮時迄、御小水三度、宍合三夕程、夜ニ入五ツ時頃、大便少々御通じ、朝・昼御飯、湯漬飯軽く貳椀、夕方温飩三椀、夜ニ入六半時頃、粥少々、被召上之。其外、蒲萄少々^(マヤ)ヅ、被召之。其外、被為替候事、無之。

翌十一月一日、昨日から相談し依頼していた医師中島玄伯がやって来て、診察してくれた。しかし、これといった「外ニ了簡も無之候得共」、他の薬を調剤してくれるとのこと、翌二日はこの中島玄伯の薬と草間宗仙の薬とを併用してみる。

翌三日、はじめて薄氷のはった寒い日、馬琴は胸痛がひどくなり、四日には中島玄伯が再び来診したが、馬琴の容体は変わらない。翌五日の朝、お路は屋敷の後の竹を切り取り、舅に吞ませるための「竹歴^{ちくれき}」^(四)を一合ほどつくる。そのご、門内で舅の病氣平癒を願って観世音を百度拜し、十一時頃終る。医師ももはや「詮方なきよし」と告げ、一同「残念至極、歎

息之外なく、最期の近いことを知る。

家翁御容体、御同扁与申内、昨今ハ別而御胸痛・御煩悶甚敷、御腫氣・御勞氣、被為重候へども、医師も、実ニ詮方なきよし、申之。外医と云とも、何とも同様申候^{ニ而}、残念至極、歎息之外なく、昨夜より御小水今朝迄四度、老合老夕程、今朝より暮時迄五度、老合式夕。今朝粥半椀程・暮時温鈍式夕程。今日より、竹歴御服用。右之外、被為替儀、無之。翌十一月六日の早暁、午前二時頃すこし小康が見えたが、ほどなく最後の煩悶がきて、それも束の間、午前四時ついに息絶えた。太郎は病床で、次のように記す。

昨夜より家翁御容体御不出来^{ニ而}、御胸痛・御煩悶甚敷、少も横^ニ被為臥候こと被成がたく、御煩悶度^ニ付、御葉・竹歴等、少ミヅ、度々被召上、八ツ時頃より、少^ニ納候御様子^{ニ而}、被為臥候所、無程、御煩悶甚敷、終^ニ御養生不被為叶、今朝寅ノ上刻、御息絶被成候。種々薬種・医等、手を尽すと云ども、其詮なく、終^ニ御遠行被為成候事、御老年とは乍申、歎息此外有べからず。早速、御床北向^ニ相直し、御香花、其外とも奉備。一同歎此上有べからず。押し畢る。この日、江戸の空は小雨模様で、肌寒い日であった。親族や知人たちがあわただしく出入りする。そんなとき、お路はひとり伝馬町まで燈明皿や花などを買いに行く。そんな母（家母君）の後姿を、太郎はこう書きとめている。

五時前、家母君、燈明ざら、御花、其外種々買物^ニ伝馬町^江被為赴、無程、御帰宅。

滝沢家に嫁してから二十一年間、夫宗伯と死別してから十三年間、姑お百亡きあと七年間、ひたすら気難しい舅馬琴に仕え、さらに馬琴失明後はその眼ともその杖ともなり、息を通わせ合ってきたお路——。そのながい辛い日もついに終わったとき、お路は代筆を続けてきた『著作堂雜記』^{二五}の最後に、お路自身の文章と文字で、舅の最期を次のように書きとめる。

嘉永元年戊申十月十三日暁七つ時頃より、家翁胸痛発し喘息して、奇応丸熊胆等を服用す、十五日草間宗仙来診、三子

養親湯調進、其夜喘息少々宜敷方にて、半夜に至り睡眠、十七日宗仙転方して、小青竜湯調進加五味子、十九日、喘息に名薬之由に付、山鳩黒焼少々進、其後是不用、廿一日喘息胸痛被_レ為_レ重、小便閉にて下部に水気少々見ゆ、廿五日湯息、宗仙金□門冬湯に五味子杏仁蘇子茶白皮辛歴等加、追々煩悶甚勞増に付、御全快心元なく候間、尚亦名医も有_レ之、御意に叶候医師に為_レ拜診可_レ申由、先日より度々申に付、其後外医にも見せ申度旨に申上候得ども、若者歟余命を貪者に候は_レ左もあらめ、我極老に至り、医師三味いらぬ事に候、宗仙義見立違候歟、又は薬違に候は_レ外医を頼候事も有べく候得共、医案療作共に正理に候間、以来右様之儀申間敷と被_レ仰候、四ツ谷坂町中島玄伯来診、医別に了簡無_レ之、賢氣丸料湯を用ゆ、少_レ逆上之気味、右薬二帖用ゆ、余は不用、十一月五日竹曆用可_レ申旨被_レ仰に付、宗仙に問合候所、至極宜敷由、渴甚敷、葛湯かたくり其外益気散等を用、御雜談平日の如し、其夜に至り御遺言被_レ仰、其後御胸痛煩悶甚敷事兩三度、夫より少々納り候様存候、六日晝寅之刻に、端然として御臨終被_レ遊候、年八十二、十一月八日辰中刻、尊敎菩提所小石川茗荷谷清水山深光寺に出棺、

お路はここで、馬琴が病い重篤となり、周囲の者が医師を代えることを進めたところ、「若者か命を貪る者ならそうでもあろうが、自分ごとき極老の者にはこれ以上の医者三味はいらぬ事」と、過剰医療を受けつけなかった馬琴の言葉を、しっかりと書きとめている。

そして、「六日晝、寅の刻に、端然として御臨終遊ばされ候、年八十二」という一行に、ながい辛抱の日々を耐え抜いてきたお路の端然とした居ずまいを髣髴とするのである。

注

- (一) 馬琴の日記からの引用は、暉峻康隆他編『馬琴日記』第四卷（昭和四十八年、中央公論社）の校訂本に拠る。
- (二) 以下、年齢は数え年にしたがう。
- (三) 平胃散は、食欲不振・腹部膨満・心下痞塞・食後腹鳴・下痢など、慢性急性胃炎・消化不良症などに用いる。処方方は蒼朮4・

- 厚朴、陳皮各3・生姜、大棗各2・甘草1(單位はグラム、以下同じ)。これに、麦芽、神麴各2を加えた処方加味平胃散。独活湯は、独活(セリ科のシシウドの根)を主成分とする処方で、風邪・神経痛・関節痛などに用いる。
- (四) 虻はクワイまたはイウと読む。腹中に寄生する長い虫のこと。蛔虫(回虫)に同じ。すぐあと、お路も持病の回虫が出る。
- (五) 黒丸子は滝沢家製の売薬で、強精健胃・腹痛差込みに効くとうたった蜜煉りの丸薬。
- (六) 柴胡姜桂湯は柴胡桂枝乾姜湯とも呼ばれ、動悸・息切れ・神経症などに用い、処方柴胡6・桂枝、瓜呂根、黄芩、牡蠣各3・乾姜、甘草各2。
- (七) 五苓散は五苓散の誤記とおもわれる。馬琴も文政十年の痢病のとき五苓散を用いている。邪熱があつて停水のものに効があり、急性胃炎・感冒など諸病に用いられた。処方沢瀉6・猪苓、茯苓、朮各4.5・桂枝2.5。
- (八) 拙著『近世病草紙』(昭和五十四年、平凡社)二六三頁。
- (九) 服部敏良『江戸時代医学史の研究』(昭和五十三年、吉川弘文館)七五一頁。
- (一〇) 五積散は、寒冷や湿気にあてられて起こる諸病に用いられ、血行を盛んにし、諸臓器の機能をたかめる効能があり、気・血・痰・寒・食の五積を治すという意から名づけられた。処方蒼朮、陳皮、茯苓、半夏、当归各2・厚朴、芍薬、川芎、白芷、枳殼、桔梗、乾姜、桂枝、大棗、生姜、甘草各1。
- (一一) 鳩の肉は薬用とされ、寺島良安『和漢三才圖會』(正徳三年、一七一三)の「斑鳩」の項には、「主治明目、助陰陽、久病虚損補氣、令人不噎」とある。具原益軒『大和本草』(宝永五年、一七〇八)の「鳩」の項には、「斑鳩性甚よし。虚を補ふ。殊に久病の人、老人を養なふ。青鶴も性よし、鶴は補益の功より、悪瘡疥癬外治の能多し」とある。当時は、津村淳庵『潭海』(寛政七年、一九五五)にも「癩癩に蝙蝠の黒焼、足の痛みにするめの黒焼、小児五疳にひきがえるの黒焼、下血に梅干の黒焼」とあるように、黒焼の需要が多く、江戸には黒焼専業の黒焼屋があつたことが知られる。
- (一二) 小青竜湯は、咳・喘鳴・息切れを訴える気管支喘息や気管支炎に用いる。処方麻黄、芍薬、乾姜、甘草、桂枝、細辛、五味子各3・半夏6。
- (一三) 竹歴(竹瀝)は、新しい竹を火の上に置き、両端から流出する褐色の液を集めたもの。清涼・解熱・止渴・鎮咳に用いる。『著作堂雜記』からの引用は、『曲亭遺稿』(明治四十四年、国書刊行会)の校訂本に拠る。

(北里大学教養部)

Illness and treatment in *The Diary of Bakin*

by Shoji TATSUKAWA

The writer Bakin Takizawa of the late Edo period (1767-1848) left a detailed diary, from which we know much about the medical history of Bakin and his family, and about medical treatment and related customs of the time. This paper describes his 1848 diary (Kaei 1) how Bakin's daughter-in-law Omichi cared for Bakin during the last year of his life, revealing much about medical and nursing practices of that period.

Bakin was eighty-two at that time; Omichi was forty-three. Omichi and her son Taro, who was also Bakin's heir, wrote the diary as Bakin dictated it to them—Bakin had gone blind eight years earlier. Thirteen years had passed since the death of Omichi's husband Sohaku, seven since that of Bakin's wife Ohyaku.

In May of the same year, Bakin suffered from colic; a tumor was discovered in Taro, who had always been frail; and Taro's younger sister Sachi had worms. The three of them took traditional medicine.

In August, Omichi grew ill with "ribyo", perhaps because nursing the family had exhausted her. A doctor visited her at her home as the fever persisted. Her health was further threatened by worms. She recovered in about ten days, from what is believed to have been an inflammation of the intestines (enteritis) caused by bacteria. A young girl from the neighborhood *tofu* shop also was afflicted by "ribyo" at that time.

In September, Taro was bedridden again, Omichi nursing him through the night. In October,

Bakin experienced an attack of chest pains which would lead to his death. Barely able to breathe because of asthma, he took the charred pigeon powder given to him as medicine.

Omichi faithfully kept a record of Bakin's condition in the diary while nursing him day and night. Bakin himself realized that his death was near and stopped receiving unnecessary medical treatment. Omichi finished Bakin's *Chosakudozakki* description of the last days of her father-in-law, Bakin.